說叢大全

秋之部下
冬之部

五

蕉翁發句說叢大全卷第五

葛飾　素丸　著述
仝　南臺　撰校

秋部下

冬部

伊勢の守武が云ひしん爰朝ヲ以て
秋風とハいつまの西行きん我を又

爰朝乃ゝろゝ以ゝ秋ゝ乃あきの風

林　云ち爰ゝ云ゝんハ爰朝の氣情秋風のきるとなるをいへと俗

なくも残せしを一句のうちに立うくし身にしみるといふ秋風のせん
さを得し格可考 解 云只野间の山海の秋風にさへ感ぜしたる句と
見るべし 歐陽永叔秋聲賦曰 無益于物を今 愛有暑さ 袋 此句を出さば

説 此句詞書なくしては哉へがたし。評林には詞書を絶し句解
には沢されば、知るべきかたなし。此句ありてハ略して聞えしき也。
訣業のためにせんには略を用ゆべからず。句選には詞書なし。林 例の
含糊。但し句の物によるべしと云書物也。に不紫だへるのす
そのかはりに、身に沁みしとめでて、秋風の音ハいかでかと、記し
さ絶えりの也。○ 叔翁ハ武の理屈をもはらにして、今我が句作
らば、秋風を義朝の心に似たりと云べしとし。美朝に似し思こハ

有情の理屈ありて、秋らば、義朝の心に似たりとハ俳諧にあらず也。
実に思はず。古代の俳諧ハ、これ理屈ならずと考へてまた風雅
の道理にはそれば、ただ餘涎をなめる人、いまだ粗。然りて木曽殿
情の句を義仲の勇烈に比して注を附すれど、妄邪餘多也。信すべ
からず。理屈をぬきて、姿の正統に云ひのべて感ずるハ翁乃心胄。
又一層々也。解 餘りに康末なるにや似たらん

枯枝に烏乃とまりけり秋の暮

袋 云是暮秋の寂しき躰を謂ん迚枯枝に鵜の留りたるをしと
云て寂寥の躰によそへられ此躰なくての人は作に及ぶべよ

いつれも芭蕉の骨法是なり云〻〔解〕云此句ハ季吟芭蕉素堂一派
新立の茶話口傳の一章也夫木集よ慈鎮和尚歌ゑ為初くらゝや
せんゝゝてよう我成の枝乃わを鴉〻きかこもれ公よ〻叶〻ア口
一とせの花紅葉の業枯とゆく人間無常の観想もいるゝ〻〻〔林〕
此句を出す次
〔説〕〔袋〕よ鴉と泥ちり大よ誤りといんゝの也文字あまるゆへ鴉
みているゝ〻と古式よつゝ〻ゝ〻ゝ僻見より鴉と泥ちるあや可笑
○宗瑞曰鴉と泥ちるハ鴉とゑんたゝて誤〻〻ハんゝだ可也廉末
の至也○鴉の泥りゝゝ中ゝゝ云譬喩也云ハ誤りし泥さゝ〻く
枯本よ烏のゝ泥り居ゝと乃ゝ〻〻譬喩ハして句の正脉とう

〻ゝ〻ゝの也〔解〕ゝよ所の季吟芭蕉素堂新立の茶話口傳〻〻云
事ハ泥ゝ〻〻素堂と季吟の對面ハ泥きゝゝ也黒露よ〻〻〻〻ゝ也も
右のごゝ〻答〻〻〻季吟誹諧を業とゝる所ハいまゝ洛よ住す関東
〻呂風〻節ハ芭蕉ハ俳傳をつゝ〻て〻ゝ〻ハ平家を業ゝ〻ゝ
誹諧を於ゝ〻ゝ季吟と翁ハ師弟の事なハ口傳の茶話もいる
〻〻〻〻素堂江戸の深川よ居て何ゝ是よいつかゝんや男ゝよ翁江
戸〻ゝ〻ゝ素堂と隣家ゝ〻ゝ但深川六万橋薩家と素堂の文ゝもいるゝ〻ゝ
杉風雅よ乗ゝ依て此句の相談等いゝて正風船一派の新立の誓盟
有杉風使と〻ゝて此誓盟を元禄年中の支し〻〻ゝ〻ゝ
季吟ゝ〻ゝ何ゝ此誓約ハいつゝんや雅信用者也一大の虚傳

犬ニと知らざるぬ○芭蕉の句。さびしさハことに侍れバ。余情よりありて八百
年らく先なるべけれバ。今も堂上まで。此句定家卿の。浦の苫屋に
を並ぶ侍るぞ。秋の夕ぐれと案ずるよし。或人語りて真偽ハ知らねバ
都て名句と云ものの。解せられた解ハせずともあるもの也。ハアツと心に応ずる自ら
開悟解得をもあながちに是とせんにも解すべからず。予又一円に
證歌を思ひ出でたり。夫木抄山畑の畑のたつ川ほとりなる楊柳の夢
のまとめきはふくれ是ハ住吉明神の和歌の切れ字を示現し給ふ
流字也。井蛙抄又連俳集要にも見えし 此姿なりや又似合侍らんかし。

此道や行人なしに秋のくれ

〔袋〕云此句ハ秋の寂しきにつけて俳諧の道にも携る人がなきと
歎ずる句とみへたり〔林〕云空山不見人と云ふ詩の心にやあるらん
作られ〔解〕此句と出さバ

〔説〕〔袋〕志ぐらく成行る其志されども。ぱちを流く入るがふ心なく
ハ注しけるものや。儲色ありともやいらん。〔林〕例の小児の常ながら
こし此一句ハ空山なる小名の人をもみぬ也。志ぐらく詩と解し
そこなへ候とも見ゆ○林僻来人少。山長去鳥微ともありて
秋暮ハ殊に寂寥するさ故にて道行人なしと云ば。一人もひと
の通らぬやうしハ見ゆべけれバ。切て寂寞と。摸寫し出さむために
行人なしとハ。句作りせられたる也。此七文字大切の所也。見ゆべき

詩哥にも、興とかれ有とおもふといふも徒言（ダゴト）也。かゝるとゝもなきた
なげきたるのみにて。其時の信切を述ることそ。句とさもへべかれ。又
俳諧に携る人なきとおもげくとしても。深くせずば。此外にもさま
ぐ無量の雑もいうべくれど。翁れ心肯にいはれば。史もなる
ていきんにいは。古風の入がが。祢らるゝ。理屈。新話。小のこ拾ひて。
其実の風雅をたのしむ人なきを。一本ゑさに歌く知といけんば
若しかるまじくや。本曾れ情の句と勇烈に比へたる。注者なるよ
るぐんと。歌り作し時もあるべし。能く了解らるべき事しや。

桐乃木に鶉なくなる塀の内

〔袋〕云此句は德有て世に庸られぬを寂寥と物淋しく暮す
人への挨拶也。桐の木は鳳凰の栖るべき木なれども塀の内に
鶉鳴ことを云ひなぐらる足ゑさには野邊の秋風身にしみて鶉
鳴し係の景を本意にして今は塀の内にも啼くとの作や

〔林〕〔解〕此句を出さぞ

〔説〕〔袋〕一向の邪註。笑而斷聴ヲと云是也。引証もつづかなる
とおもる也。予が説にも及ばん。古説を挙て證とす。るべし

○古今抄中にまはしの證句に此句を挙て曰。鶉の一章は。
田荘の酒家と云類ありて。こわさより。其家の富栄を思ひ
やりたるさまなり。とくて文字に句を切て桐の木やと云べりとさ

又は梱の本に發句なるべし。是は梱かとゝ云ふ。貧家を称する発句なり。貧窮なるゆゑ句を切て塀の内と隔へきかとゝ云ふ。況や貧窮なるゝは句法も古幸の裁入るゝとゝ。今やふの字働を深き。遠く田荘に白鷺と見やりて云ふ梱の本に冨貴と思へば貧窮をめぐらを屋さやゝ居ると成人乃歌ぶけるは發句は類とおつる事動くと動うるとの海ゝ也。此本は振の本に方のゝんとゝ云ふは躰用の海のきふやゝ是は貧と躰として梱を句作の用といもむ。ゝを振の枝のとゝ云ふ。官家の格式の姿のゝん相を田家の富貴なるとの也。てやゝ云日ゝ家ゝ此梱を吟ずるとゝ云ふ。此一件ゝて。句意は吟ゝこの也。盲人の邪説用ゐ屋ゝず。

を田の神社よりふで寶窟が兜錦のゝ乳ゝ
樋口は二郎ゝ使せ事とまのゝ引ゝ縁起よ見ゝ
むざんやな兜の下のきりぎす

袋云是真盛ゝ鎧甲を見ゝ追悼の句也渠老衰かゝる氣力は壮年を以て討死せ事寶窟を三秋の末声ゝ見ゝ兜
てゝゝむざんやかと云ゝ彼討死を悼ゝ言葉あゝ見ゝ
翁ゝ物を形容ゝ皆此類也林云須書ゝ寶窟の錦のゝ
護ゝゝ霊院の寶物出て拝ゝ也ゝ句姿ゝの本拠ゝ

上の文字なるきりくをとりて紀一字一路乃格字あれーうこと
よりへてそらくをかうり所ーのハ所は生るハいうふせんうきこと評
を殘す 解 此句は出さず

説 袋 例の入ながつへくもけるず甲と上より出て きらく雪こハ
理屈のきりなる所也 夕ぼかりや首飾らくみと いしーぶこし
古風の俳らくを人 いまぐ絶もり 不可信用也 又こ秋の末声す
るぐきふ強と ゾへども 此句吟ぜーハ七月也 末声叶ハぬめや
又こ秋とこハ 文法こ三年のるとゾり 愛堂の三周忌のうし
ふた きるべきこの末声ハ 赤ふるおかし 秋風の殺聲なぐくを
けりん文育なる文言也 林 主ぐらく弥ハけるり 保綱云 異セ

しハけりく けるる句ハこと出なくしていけりかるるず 予今こと
を 慥よ出と ○奥羽記行を考るふ 元禄二年七月十五日
加賀小松はの右田の神社よ詣ッとこ行かむざんやみとけり
なふあかの二字と云る 是正風俳よけりくむるの所也 あかむざん
やみとよ詞ハ 實堂乃謡ひふ 樋口の二郎ざいしー語也 其時の
河を載入ぎる所 翁のよつま働し 此あり ぐ 尋常の人 重あ文
字なし 凡是よけりぐ所を移とべ 自意ハあきらし 旅情ハ
限なく懷舊の句也 遠悼をふハけりーのべきや 古なも入ぐる
らぐ 却て出色者のうき名 云てんうー ○宗瑞云 あかむざん
やかの文字 たくへば 如出て 扇屋ぎけりくを 屋よ 川袋也

○ 菊 第五

垂されし檀林の餘風を改めんこゝろ。今ふ世くおふて。あか
むぞんやるも。却てけりなきものと云ひ充て也

菊の後大根ぬかうけらかな

解 云不是花中偏愛菊此花開後更無花といへる句の意
こゝろ。れの余情おりひあいと（貸林）此句と出さぬ

説 此詩の心よ叶へつゝと解しては翁の一風建門の心骨ふけ
らぬかや。此詩を仮りて一路しる句也。そこゞ俳諧の意地
也。○拾玉集第一にとせめてうつろふものをきく菊より
後鳥羽院しなれたと慈法和尚の詠けり。詩を引ふも及ぶま

じ。況てけりの閑後此二字のうへ。○拾芥抄曰。世傳嵯峨
隱君子元稹詩不是花中偏愛菊此花開後更無花云云
を愛吟を。一日忽元稹ゞ形を見る示て曰。花開後ハ誤也。花
開盡也云云。○宗瑞曰。けり句の更乃字ハ更無花の更とれ
さへくらしと尤然り。○句意ハ此菊の後ハ　也とべきこゝろのハ唯
大根のみ也。倍人ハ奥物を所きとぞ。隱者光衰の分ましハ菊を
隱ゆして。靜なる。大根ハ陽ゆして。補ひきをぶと。待成ずへて
紙まつり。其本意ハ。つをくゝ系の。ちおしねうり出ようとも。更
ゝ云字又とり山義まて。決而ぶ一とふまたけりまで。葱ぞくを
けりをぶ。ゝ後き菊くゝ。ぞんぶハ。大根なるべしと解とぞ。

先生の言さぞ化。かゝりても翁の句法移んごろなるを感ずべきなり。○或人曰。此句右の句意なるしかゝ。その句ごとに菜を出すなり。大根は根生也。予答ていはく理論也。只菜は大根より外はなし。海ぶきとなる。人生の語なり。やゝ老くなるに。先よりは火炉のもとせちろとはいひぬや。今日乃人情の事を云て妙也。理論は和歌の風雅なるべかりけるぞや。

座右銘

人の短をつゝむことなかれ
己が長をたのむことなかれ

ものいへば唇さむしあきの風

〔戒〕云先は座右の誡の句なれば云ふべきを云ふと形容してもりて支なかるべしと詠也 〔林解〕此句を出さず

〔説〕〔袋〕一句のかたを形容するはいかゞ。崔子玉が句を和して。句ふしたるを注して可也。世俗は銘をも翁のごとくとりて人ごとに可笑也。此誡は感ぜず。発句ゆゑ世事あるさらの也。此座右の銘は誰の作と云ふをも考へ合べきなり。初学のためは全文を書記して。母子童と男子べの子ぶべ。○後漢書曰。崔瑗字子玉。早孤ニシテ銳志好学。書能

傳其父業作座右銘曰無道人之短無說己之長施人慎忽念受施慎無忘世譽不足慕唯仁爲紀綱隱心而後動謗議庸何傷無使名過實守愚聖所藏在涅貴不緇暖暖内含光柔弱生之徒老氏誡剛強行々鄙夫志悠々故難量慎言節飲食知足勝不祥行之苟有恒久々自芬芳○唇さむしとつるは唇盡歯寒とも也語ふり也ふり初出のこと故事を挙○左傳僖公五年晉侯再假道虞以伐虢宮之奇諫曰虢者虞之表也虢亡則虞必從之晉不可啓冠不可翫一之謂甚共再之乎諺謂輔車相仍唇亡歯寒其虞虢之謂乎○戰國策ふい唇反り歯寒しとも同じ

ものゝ世の俗語ふ多くものこひしをいふ風を入事ぞとも思ひ合されて此句を解とべし

增補

為身の毛うとうとうとうけ

(説)花雀が芭蕉句選ふ為身毛やうとうとうとうとも也

語也いづれの集にもとりてとるべき○東西夜話に曰
先師一句を花の歌にとりて名月のむかしとみえて棉
畠ともいふべしいにしへ花の地に成て木綿の花の咲るを
已て作意とくいはるる連句古詩古歌を用るいふべ
の趣あやはるんをいふ名月やとは切も亦仮寫の誤也

かぶとぬぎかぶとやぶるの下むしぶ

(説)東西夜話曰先師むかし高瀬の濱に漁火と云題を
うけて此吟ありし今霄桃妖亭に此句を評して曰無火の
響うに奥をあまりとまりうひきぶと云一字くらをていはば小

海老の腰の曲るまで一句の魂をとらんと云ハけだしうの
と鮎も鰻も目しひとなりとれり人を見るに小俳諧と云ハ
ばいとなし

所ゆきて鹽にあたるか

(説)此句檀林の比乃吟ふして最初ハ海老の腰の曲るまでと云
詞なりしが師ふたゝび改て云ハ此句を名指らしとうや荒野の
んうとなり○五雜俎曰凄風苦雨之夜擁寒燈讀昔時
聞紙窻外芭蕉淅瀝作聲亦有致此處理會得過更無
不堪情景とかかるとも必ずしも及ばざるべく吟ぜ出しれも
んも知るべしいにしへ漢古今人情の感ずる所一毫も私なし

是等も彼の好事者に見せば、さや立ちて顔に出し是に寄せ
さる。是に叶ふらんど言ふ也。況ぞ、それ我が身にしての疑詞を
する。此語乃血脉とも見るべきにやと思ひ居る也。○三者
色篤能くして、御廟年経ても、松句本からしの貞八、如是の
縁以三四章もなり。是序詞をかえて句となす一詠、唐・句の法
とも云ふべし。

鶴なくと誰が松しまの行て渡

説 句選に、以又みな鶴なくと記して、秋の部に入れられ。何とも
なれば、しき新の部乃句と可すを、知らざりきんなに誤れ

るゝ。又あさよきと云詞の意を、まきまえざりしにや。自己の
邪推をもて鶴鳴くと忠して、おまけに、鶴鳴くといひて去。
句意に遠くする。然て此句不解。翁の心骨に徹しぬ也。予
此句数年にして解しぬ。稲中庵黒露に先年聞かせ
けるに、是もはじめてか様に詳なることを聞けりとて大に
歓びぬ。よく解せりと称しき。くはしき説は、雑の部に出し
侍りぬれど、今ここに略す

腥(ナマグサ)し小なぎが上の鮠乃腸(ワタ)

説 笈日記曰、小なぎの事は、浅暑なるべし。是と一章の話

意と注し侍れとも、いかゝ。菊もいとよろしかるべし也と云

○ふなばた　水蔥　うち大小の異種あり。今世倍のあり。蓼（ミヅ）（アヲ）と。田の中或は用ゆ堀の中、田前の溝、又は沢池ほとりにあるあり。夏五六月淡紫の花咲て、葉は菱のごとく、葉ぶとくうるおえり。俗名抄水蔥穀水菜可食和名奈木又延喜式、万葉集、水も見えたり。和名抄に水草とも見えず。千板（ヅ）（ヅ）かせとの説は誤なるべし也

○ふなばたなれども、是は五尾の説ふさわし也。予壮年よりこれを釣て好み、今より四十年、東西の菖蒲は殆ども歩行すれば、ふなばたの七八月はまで咲しなるべし。その頃のなるべし。村の寺などの池、龍の鰭（ナニダケ）のごとくにて、うるはしく出るべし。はく腥臊（ナマグサ）うるし。漆の殘暑乃

時候、哀しもたのしび

○白氏文集第三新樂府、緯戈人詩曰、朝食飢曷費盂盤、夜臥腥臊汚床席、此歌腥臊とは別小。よるのやどるまくらこそよけれ。阿仏尼いざよひの記よりうまれてる文章なり。初学のあるべき也。

ひやく〳〵と蛙なきて星流る　蘇小

（説）笈日記曰、此句いふかたんとやさしを只殘暑にうるおへかるべし。板屋の泊よりあふるゝ雨なるべし。思ふに人句とんと中作は此謎を支考ひとりしたり。案ひのゝ果めとうろ

○芭蕉行状記曰、元禄七年七月十日の又

年賀の方へ仏に乃そうしゐ多いとけうてうふも栗陳の[illegible]
ちはるくやそうんたまゐ殘暑の仏をうて此句ひう此[illegible]
翁齢五十一ゐて雑波ゐ終ゐ[illegible]

右秋部下

十有三章

冬部

口切り堺の音ぞ炉のうしき

解 云深川支梁亭の冷也豪州堺ゐ利休居士指圖の露地ひう句意是等ふうゐ品也豪州蒼海潮くとええうゐを墨く植陰ゐてゐるゐどつうゐ酒ゐ[illegible]せうう 林袋 此句を出さ[illegible]

説 句選ゐ支梁亭うゐをゐ[illegible]ゐ深川とふゐ 解 さもひうゐ[illegible]ゐひうとゐへども利休指圖の露地のと[illegible]ゐうゐ[illegible]ゐうゐて深川とひうゐ[illegible]

云よ也けらん。翁の本意ハ背きなん。○堺ハ利休の産ちといひ。又師紹鴎旧深乃地也とのむかし。海ちかし庭よ泉の水北ちかと。いふ。宗祇の発句を利休感じて。茶話りとより此心なりと。堺の露地ハ其領もし絶まてらぬしいど。深川の露地も。海ちかくそんて。堺の庭よ似てるぞなれしきる事なん。かつ此ハ露ぢら。露地なもよろべかれ。すべての調度食物の類のうへよ迄けても。此飯ハ出ぬべし。又なれのことを云ハ。いめしへを慕ふ心のこれも似るぞあらしむる也。假顔(ナツカシ)眤懐(日)るも古書よ訓きり。○此句のうらん廻りて。例よ翁の心骨を捜きれバ。此支梁亭の露地ら見をとけバ。思物名訓とべて。薄美を尋して。為ちめ絶そるが。翁の心よハうる歯しくそりけく。堺の庭こそなれりしまれと。京深よ風流成せられ嗜しし。今の京人ハ名聞名利自慢嬌奢のことをつくしして。詞ハ殊勝地よ作りけむの本びのとしの花。添へ者けるハ。人の不善の蔭くをかこねの中紙たのしきと半子幽士ハ翁の句意ハ。甚嘆よ蟲蔵るきう。

長嘯の墓もめぐるや鉢たゝき

解 云長嘯子ハ木下若狭守と号ん金吾中納言秀秋の叔兄也ならよ世ん代いろんて洛東霊山よかくれて和哥を流を慶安の始卒しまよ其詠を集て挙白集とん小塩山の麓よ古墳あり 袋林

此句出所

㊟此解、句解ニ拘らず、木嘯の畧傳記也。作者ニ用なし。句の
出所と、句意の微中を窺へきとして、加る事にて六条訓なり。又或
書ニ長嘯子ハ、太閤秀吉の甥なりと記せり。甚偽也。既ニ
挙白集の内、宇治の河霧と名ある辞ニ云、何る所ぞとあやしまるゝ
さへのとかみなかりけむ家とぞおもひしに古大閤御所なりたま
ひける海へなんつゞけるとある ○挙白集ハ長嘯の家集也。四季の
和歌を初として、一代の名文章ひとつにあり。俳人常ニ座右
ニ置てよみ、其中ニ詠ゝきの辞をも考、気流をそく
言なり。りて與を得の最初也。木嘯ハ、戦國ニしてか

まのあたり眼をつけるべきものなりし。豊臣公ニ秦清なりてより、諸
人風雅の心もうかみし。太政所の甥木下若狭守勝俊、
和歌の秀才名誉天下無双にして、文章も巧ニ絶世乃博識
なりし。霊山ニ隠居し長嘯と号す。もろ〱和哥文章を好
すかれし。詠ゞきれ姿の佛しく和らかく、情も風き風流なる
ものぞ。又捨風之物ならずとや。心をきそん。詠れたの辭を作
まつりて辞ニ、墨客ハ空也の遺法とぞのいふなることのみをさる
たるきとなつくい川もみな水になりさむき霜をれあけるこな
みてとふつかねんとかくのつしてて大海をすくふばかれなさい
ところ人くめさめてふ家すつけるる卯の花みられ年

かゝ浦こゝろす　ちらたゝきけるうきかくしの一事ハ季元和い
へしめる所にて候（此外にも十五六筆の詞あり）是此書に記しきしをりてくるま
権輿（ハジメ）と云ふべき也。或説後難波の西鶴が辞ハつくしの松葉隠士
の辞ありて。其角ハ様々きゝ候ひて辞多く連綿として
世に伝わる。辞ときと云ふ事ありにけるを。然れば。○句意ハ。然るに世に
ありてゝやさしは淋しからぬ事も。隠さく長嘯の辞にもらし
すりてなれば。何をも夜毎には。此墓を訪ひぬらんに
といふかくも。めぐらすハなるまいぞとぞん。又空然としてる
みかはふたりのうぞ。玉ハ小塩山のかたハさうかして。詠
数の多くにして見るにも。其ほどくらいのぞうしも古人風韻

の古墳ハいづくとも知れずと云へど。長嘯を限りと所を定ふべき
ものなり。祖師の空也小塚てハ。長嘯の墓は来まるかもの姿也。
予さいたりて偶作に。長嘯の文集を人か許諾といひ於た
るしも。かくの如く知れるかくいわしく其外同人あるべし。此事ハ
愛着して為すとぞいふ。されば此塚を知らぬ人ハ予
が句ともおもふらん哉

對門人僧

これや世の蝶に深らぬ古格子（盒子イ　合子イ）

【解】

云此吟句選に古格子と出ある由日記に云行御の五巻一

那陸〻殘し置まるを踏通法師七条の住湖南の旅亭に贈りしを
ふくろと洞云ひり 林 云寂蓮法師ちわやゝの深山のかれ葉の雪
をの扉をかけかの字蓮華初開樂の心あり〻けかのうゝ小元つく
ふはあゝねとにとるく似ようゝ法風情なりを見よせて一句一首の
格とおりよへしや嫌ハらけて曙の氣象にとかく

説 此解ハ不審の事三ヶ條ひり 其一ハ 古格子 古盒子 或
松の内 解 ハ古格子ハ誤也と云ひ 卿ハ古き集ハ古格子と
云ひ 句選ハ同じ 史邦ハ笈の小文車ハ 古合子とひり ハ
香合子と 解 ハ遠へて 解 ハ誤る事 神日記ハ
吏登ハ云へ云ひて 古嵐雪の書ハひりぶ 先年我も

ハ事ハ〻 又ハ云ハ云ハ〻 いつもの云ハ〻 出ハた
しの云ハ〻 又箱の高足の云通ハ云ハ〻 何を
證として盒子ハ松ハんや 又踏通七条の住湖南ハ遠ハと
ハ箱と別きて松七年ハや 年号も月日も知て いつもの法
と云ハ〻 又箱の云ハ〻 湖南ハ〻ハ
かれ海 たやすきれぬ事 疑ハ〻ハ好事の人 盒
子ハ附會せんハ云ハ〻 ハ〻ハ云ハ〻 伝用ハ〻
○才二ハ対門人僧と称云ハ〻 ハ〻ハ踏通七条の洞云ハ
ハ〻 二年ハて心も相違 又対門人僧の頭云ハ
ハ〻 向ハ遠 ハ〻ハ踏通ハ今対ハて

なるまゝ吟ぜしなり即吟ずるなり也さすれば又徒事ふ送りとゝるゝと
云文脈始末ワのゝぬるもの也○廿三ふ僧とゝ問ふ格子ハ何
合ぞ定て是ハ盒子なるべしと推定の決法なるか盒子ハ
あや郷れ太刀門人僧の四字なるべしハ格子のゝとゝ校
まとゝん僧なりとて格子ハなきよしもいふべし市中の仮
住ぬるハ僧なし此流も亦偏屈し盒子のゝハ季世宗書の流
ゝて宗和所ゝうなるべし増て七十版を以来の事宗正義
ハ誰もゝ知べし古格子とゝ諸古人達の古とゝ
うぞ予ぞ方ゝ是ふまゝぞよるのあぞ○此句全く古格子
なるべし いうふとなるべし是ハ門葉の僧ふ対して挨拶の句

とゝんゝゝ世ハさ海ぞふ むさぶりかせぎこゝぞふり寿して門
戸ゝゝ茂樵へ居ゝ事ふ此住居や さゝそうふやさしゝ淋しゝ世の
濃や蓋ゝも深ぞ風流ふ古ぞる格子とゝ古人なるべ
へゝ稚兵ゝゝ即興とゝんゆ ちはゝて對門人僧乃曲字もよ
うゝゝ句を守え意味をいりつぞゝふと跡通ふ這まる挽と
尽ゝるとて 悔ゝるぞ此如古挽ゝるゝ吟ぞて行の冷行ゝゝや
ゝ此ハ句とハ云雅しゝゝゝゝや一句ふ面白の親ゝと題ゝと二つゝ
ゝ海ぞき著也 ゝゝゝぞ 林 ふ扉の家を作りたるゝのゝ 悲ゝく
話を作るゝ所ゝるゝ 万一盒子ゝ吹る正事跡ゝゝぞ 追て改むべ
し 正證なきゝうしゝハ古格子とゝ面ぞ 郭ゝの四字なるべ

うつりかはりぜ也。〇又此句季とする事ハ。蝶拂乃ちなるべし。然らば格子いよく櫺あり。然るに。蝶を拂ふ古榜としてハ。いづれの季とせん。何とも定めがたけれん。意の古くすけるハ。古道具屋なども。然るにありて。季とハ定めがたし。況や冬の季寄にも無けれバなれバ古格子いふべくちるを。巷の蝶とつげける。蝶拂のかなるべし。〇路通が事頭陀物語ニ涼袋述委しく記しぬれバ。然らも高麗椀のあるしらずども。丈艸ハこころかりそめにもいからを世に知る。後と添て意しと見ゆ。萎く正しくも雖え。路通ハ後に龍慶橋。大屋氏何某の方に寄居して。そこにて享保のなかばにこのや病死しぬ。俳書三四巻を寫し置て予が家什とせり。路考といふ

路の字も路通より傳へしもの也。

世の中ハ（ふるも） さらに宗祇の時雨かな（やどりかな）

箋 云世にふるハ世を經ることなれバ。ふるに時雨をかけて世を經り行宗祇の心になぞらへ時雨ハ面白きものなりと也。林 云此句ハ宗祇法師の句に世にふるもさらに時雨の宿りかなと法豈銘（無益な事なれバ略之）是考するに笈日記にハ世の中とあり。是誤なるべし。新古今二條院讃岐 世にふるハくるしきものを槙の屋にやすくも過る初しぐれかな 宗祇の句と出る人しかし老りし世にふるハ成へしやかけて歎念のうき世下暑 此宗祇の句につけてもち宗の句ぞ遠ひけり 予 讃岐ろ

ことを注釈としてかとりしかんなる考也 句選 云イニ世ふうるもと
ゆく杉風所持の短冊よりの中とゆく

説 袋 一通りなるべし 林 淡彼のおもむき・宗祇の句出ずくとも或
又は句小枕・ほくろのうつりしかへるべし・但し文字ちがひ事・
笈日記ハ去年ゆゑ撰みて誤るべきなれども・雅言のぬめ
りを嘆ずハ・宗祇の延年ほどにて・世の中にて・一
くるを小・を・支考ましにおかせとかへたり・又世の中・世
のうつりを・どちらも同一ふう・面の縁侍よりるとハ・宗祇の連句也
世の中ハ・ぬめりハ・俳諧の利口也・連俳のワザ・ものもかくせ
淡彼の句のことを注しもしハ・俗諧おもたづねるとゆふべきこう

ゆくく杉風所持の短冊より・翁の自筆なり・世の中とゆくるうへハ・なほ
の語ゆくるべきや

住侍る旅の中垂るる

袋 云是亟巨燵ゆかとそして旅の句成ゆゆ或人住ものを炭
絶るゆくるハ語也いまとそとと居ものを垂るるのつるうへ
ゆ句也 林解 此句と出さず

説 旅中の吟ゆくむるハ・此注尚考ゆ・出たるべしまたるべ
共角ゆ枯尾義ゆくるハ・芭ハ意鎮和尚の教ゆ・旅の世ゆまく旅
病して苔ゆくゆあれ・ゆ義と考るれと・ゆまも注ハ

しめやひ合をけうしあらう。○若くうまぬと。歯ぶくれの句と
云んうハ。尻をうしぬ旅疲の身てハ。歯くくれのさ面こしぬ
と。一所不住の観想乃句とせんこと。ほうぶきや。又歯ぶくれハ
雲かくしくうれやとうわぶ。旅の尻ふつゝみよ。ゆくくるも聞也。
掛ホ一の句也。乃ぬハ炬燵の句ゝやいくん

茶買て雪のふくろや投扇巾

袋 云深川八負くゝ茶買よりと雪と云うけて袋と扇巾小ハ
ゆくくる祈也 林鮮 此句を出さゞ

説 行をゆきと云ひうけしくとハ。古風の解めて。入門也。蕉門

かるるゆきくをなまぶ。ちかぶく。一句ゝるの句。自然と組のつぎ
縁あるて云ひうけゆくるもをべし。是ハ雪九日の興よ。徐ハのくを
試尾ゆ。八人寄合くくに。謝などきんいざ茶買ゆと。紙の袋
さげて出ゆなのゝ。ゝ袋をくぶくゝ。扇巾ゆかぶくる。云ゆ人ぬ
即興の姿ゆ知くくゝ也。投扇巾の姿。くくゝ屋ゝ。名人の句
楽。かゝ風ゆをくゝ雪ぶぶき事し。

雪乃日手毫ゆ皮の袋つくん

袋 云山中ゆ子ゆの拙ゆくくゝ毫の裘とくくゝ十くの仏元追句
丁考又或人曰雪佛雪達磨ゆくくゝと称ら序ゆ越後毫の白き袋

○遠音五

つゝ[illegible]と[illegible]下句[illegible]句ゆゑ[illegible]

林解 此句出[illegible]

[illegible]べきを解きぬゆゑ[illegible]

説 去来抄曰、魯町曰、此句公如何去来曰、前書よ子[illegible]

て[illegible]もし子[illegible]の業と思[illegible]人[illegible]

を繼ぎて初[illegible]

先師此句を浪[illegible]予[illegible]感動す

先師曰、兎を抱いじ[illegible]

[illegible]機姫[illegible]或人云、雪誠[illegible]兎の嫁[illegible]去来曰、此説の古事

神代の巻よ[illegible]或人云、兎の皮[illegible]雪中寒氣を防く

[illegible]也と暑き日小猪[illegible]

[illegible]云

愚考古事記上巻大国主神兎小逢[illegible]

稲羽之素兎也と有文長少人暑き日本紀よ八[illegible]

今神代の巻と云ハぬの一

○まづ此去来抄を證とすべし。[illegible]を[illegible]

[illegible]ず、[illegible]き雪の日小童アの[illegible]

や[illegible]

[illegible]兎の皮[illegible]

[illegible]翁乃風骨を味ふべし。

袋 二 五文字雪の中小と[illegible]句

選ぶと[illegible]

と證[illegible]

[illegible]去来抄よ雪の日小と[illegible]

[illegible]句也

馬をさへなでむる雪のあるじ哉

袋 云旅人を[illegible]云[illegible]此馬を[illegible]

よのつゆ小馬を聽[illegible]

[illegible]雪[illegible]旅人の[illegible]

ひろしの事なしとおもひやられ眺らん深し ［林］［解］此句を出さば

［説］［袋］注小児の雪を見て白しといふがごとし。不可用。端書へづ

の集にもいまだ見え侍らず。句選にもなし。前書のなきを知らざる

人の。添ゆるとも見ゆ。端書なくても。旅人をとゞむる庵は一句に

顕はれて聞ゆらん。翁何ぞかゝる事をせんや。是百菴がいひて翁

の翁に罪を課るといふべき。○此句。まへの詞にいふを自盛し。又

かゞやくの詞に添へてあり。詠の字和ハ。歎くところ。古来よりある

拾遺集 伊勢

春立てつの身でもあるをかな人の心にそれはちるらん

法性寺家集

花さかぬハなかめひとりかへりてこのあたりまでなるらん

後撰集

ひとつしに我身世にふるながめのまに袖はぬれつゝ

此哥なれバ。上に春雨とおもはれ。下のながめハ。いよく歎きなるべきて

あらそふ也。更に詫びたらんにハ。雨二行なるべし。又順徳院建保二

年歌合ニ深山雨 淋しくのならもなし今やまさるらんみやまの秋の

ひとりさびの雲 是らハみな。春におひて歎く心の見えて。見るわか

なし。浮世思ひやるならん。見添ばながめといふ詞をつゞけ合せんとな

がめやるといふ詞ハ人も出来たり。それらよりも。眺望説ものすゝみして

見える物をすてさらにて。詠嘆の事ハなすきがめく成りぬとなれ

いふなといふべし。西土の書に。飛耳長目などいふ詞あるにつきて。長

目ハすなはちながめなれど。此詞いよくいひあつめて。新古今集

の前からよりも今になりては。遠望眺望にはた。此詞なくて叶はぬ事

小うた し。古を思ひやるこゝろ絶も。今の世よりはるかに。まさりて
殺風雅なる つふかあらんか。破閑（モヤル）遣閑（モヤスヲ）するわざ。ゆゑなくして。
ひきこもりたる男にをやらしむるこゝろ。なのめやうにも。いと
ゞ。まこゝろをいつくしみ。をきを。男にやると云詞も。ゆゑ想像の事とおぼえて
こゝろ。をのわかれを。をしみてゆくことを。えるかなしさにおとるやう。
此詞は古を思ひやるこゝろなるべし。述懐又は懐舊の句なるに。昔
を思ひ歌くつのこゝろげなるべきは。大方をとこうたなどあて。嘆息す
るこゝろのなるべし。そうちゆたおのゝ。言へとをとこやるこゝろもきこゆ。
此馬を咏るも馬を入るこゝろ。つゆはらはらゞ。よく味ひ辨へく。
咏まゝ。ゆゑなれば次ゞの秋と云句をも了解すべし。次ゞの句は。

こゝろ。つゝしみなまた。此書は池さび。此句の解あて解すべし。○扨句意
は。此玄冬の雪中の旅人。さこそ苦しき事おもひてこそ行らん。さ
ぞ。其艱難をひやるこゝろ。なるのあわれなり。又馬さへなか不便なり。
ひゞくこゝろなると。嘆息をこゝろ。也。芭蕉猿ゝ。ゆゑ入るこゝろ
あしは中〳〵此句の風肯中は。ゆゑなき事なるべし。

月ゆき 御堂を 踏こゝろ 森えんれ

【袋】云此句のこゝは徳法納言の言ふすさまじきの所也。月夜
やう〳〵揚こゝろ子路は孔門にて強き勇を好むこゝろ是をこゝろて師走の
月夜のをそこゝろ。きは孔子路こゝろ森えんれこゝろ也森さめこゝろ

老なきを姿をのべるように形容也 解 云師走の月はすさまじき様
子路うつとゝ人を加色しゝ又祝ふるなり 世盃をのみ八多の略す

説 兩書ともに師走の月とつゞけたり清女を引出してとつゞけ
所よ多なるもよろべし勇ましきだにて凄き物ふとあらば
清女のすさまじきといへるハ冷の字を訓めして勇烈乃さま
ふハいかゝぞ烈の字は意をかんみ清女もさハつゝまるべき
場て翁此句ふ云べうず公時樊會ともいひ是全く本意
ふいかゝぬるの元 ○篁之記曰 此書偽書也と云人あり云まことに説とゝ云ずとも南郭の獲蘭遺稿ふも引用ゐしかハ爰ゐも用ゐ
十列冷物・師走月夜・同肩・同蓼水・老女假粧・女ノ醉タル
・法師醉舞・無酒神樂・胡瓜老タル・勅使破打囚競馬

・昆崙ノ仙舞画 云是ふ伝て見れば清女より前ふ此事
行て清女又行ゝ云ふ南郭ハ師走の同と云ふ有きなれ
あるよ有ハ吳本成べしと迷ふ此ハ詩ふ重ね ○考ふ
此句ハ子路ゝ義を守れるの潔白なるふよりて月ふ対して
奥どしゝむ月白きと云ハ潔白の心あて冷しきものハ行
ぞ彫ふ楊升菴白の字ハ異訓を挙ゝ日光の白きを皜と云
月光の白きを皎と云ふ此月白きハ皎也皎月ともいふ也 扨ハ
子路衛ふ乱あるとすてもをつき殺ふよ 淪ふて冠の緒を切
まゝふ君子ハ死ともれども冠をふまずとて其緒を結ぶ所
うちに淪ゝ害殺まれしゝ かゝ義者の心 師走乃月はさえ

深川に芭蕉庵をしめ、いづれの比か、のちの
義とちなむことは、蕃椒のごとく世をとやかにこの語をもて
のはやし、はとりあひ合ちての吟ずるもおのづから
ハ喩の使ひして、家を貧なるがごとく、心潔白をもって買物
もとめ、俗塵をなく、義をもって交る、蕃椒のごとく、心がけをば
為事よりえきんかるべし、世を苦しむ師走とても、我ほどの
家よハ、月西向き庵さめとと、一色下ホ、つをかくして、風喩の
句なほ一しきりまさる子路ハ、ふうふ事ハ、ものや、其代ハ、蕉の胸
中ハ、推量も及ばず、かくのごとの清貧の生涯よりけてえんふ
ハ句意掌上の玉をえるがごとくあるべし、感歎風喩、とくべし。

後のえん人思へべし。○再考えん、都て句中に、重をとること
ハ、ものの、かさとなるべし、句位むくしけ子路ハ一句ハ、かさと知
べし、居の庵えもてハ、一句ハ、ものかさと、子路と重とつけること
なりし、義も世句ハ、ものかさと、つけて乃ちまことしとなる
べきなり、子路の句ハ、遠へべし。

増補

とをかくもなりぬべし　雪　老乃枯尾花

(説)此句三部ハ出さず、是を由来ハ、句ハ、此句の出所

さてぶんぐ・名所とむかしく・通りさのごとし・○其角が枯尾花の序ニ云・圓覺寺大顛和尚ことし・易に今くれてとるふようてうあんに代るに或時翁の句對れやうとえんとして年月日時を古暦に合とて笠考ちくさ華（スイ）やうて卦ふあるを是ハ如乃すきの風ふ吹を面ふ寒きうきこゝの数く去けく成ぬれとも命達ありうろくして世ふ的ふ面ふ寒きうへうきんてあれまるとようてゝ人潛なるんとすいとも如のさ去あるさよ是つうひてやとむするあるとれ〻とやとゝ云ゝ先ら此事思ひ合きての吟なるべし・句の出る所據りて感情深長也

鞍壺ニ小坊を乗るや大根引

（説）去来抄曰蘭國云此句いうる所面白き去来曰吾子今解釋ゝんに只當して去ゝ子鞍（くら）を花を園ゝに奇山幽谷靈社古寺禁闕等ニよりハ世當ゝ少ゝ古茶多し如此類ハ當の句きハ句ゝす不珠句ハ形好まかゝ拙句ゝんゝらいとゝる當句きして男ハを帝なる當あゝを先を画とゝてもよかゝむ句と句てとゝうゝむさんゝ大根引の傳ゝ茶ゝむ馬の首ゝうさけゝうん鞍壺ニ小坊を乗らるゝうと當ゝる當句ゝと古かゝんや

○巻第五

拙さんや茶せんにへし業因から何某却て兼生より感話さ
すかるハ俳諧をするすといへとも画を能する此人世常師尚景この
子也といふ○一とせ或人のもとにて。翁此配偶する帋に。讃など
ありしを見侍りしに。いふに絵発帋とそさ。親兄の前にも出されぬ
あるも表具発緊ず画も常人なる候。いやゆるかに、おもひゆさきの
うさましく思ひ過て。翌日持ちぬる人に申つかはす。浅ましき存ぬ
なりるそや翁此無と。気をもち此世上に画讃也。素丸ハ讃の法
を知らざるといへる点者もありしとかや。全く讃にハありすまい
ひ給ふせしもの。未熟なる所也。讃の法知られ知りて。俳諧
なる廻きや。翌持ゆすれに。わびのくしきれバ。持ちも門弟なれバ。

いさめて云ハせらるゝを。持かへりや其後ハ同じやうにかゝれぬ

又明き
月代や晦日にちかき餅乃音

㊮此句ハ元禄六年の暮なり。○芭蕉翁行状記云今ハ昔先師
去年の暮身を苦しみしや三十日にちかき師走の声かなしく限りなる
暮き変成へし兼好法師が語りぬべき春の月九八日の秋の空に
あひとふ人よりもおはぬ身のあはれやところ〃に見るまゝに明けぬ月をもや
兼好も纔く伊賀の生れにて更に侘たるを伝へしに此人や再び世に
せはて予傍の風雅を起しえんといふもあきらかく又いふ人より辞世
と詠すこけハ旅もく〃

手生則舞世也何事を此長よりくんやとて脇句のきり句も拙し兼
好法師ものゝ侍るとて行しとうや是ハ合られハ業言の句ゆく
成ふしてるくを侍らとゝ云○兼好一代乃名言のよし歌もこ
のゝそうに近き首明を始ふこのりがたしとや人ふ者きめ子
乃ゆゑの諭（のこゝをいへ）を脇紙のちうゆる脇句ともゝ云べ
きみや此句を南重ふ載入るのこなり又餅搗ゝ云ハ歩出ふ
を侍ゝど毎日ふ近ゝ云詞の載入連續ゝ一日ふ年の紙乃
事とゝ云べ○宗瑞云按ゝ云た餅ふ季とりてせゝるのこゝふ
もいへ自毎ふ日ハあゝど年の紙乃拙ゝ也ゝ
餅の言葉乃世ハゝ云ゝきと雨居ゝ事ふ侍ゝ

貞徳翁讃

幼名や三ゝ丸おきふ丸頭巾

（説）百菴万々葉ふ此句を解ゝて云ゝ翁と云る事ハ拾遺
旋頭歌ふ海ゝかゝ云ゝ云ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ぬ翁ふ行ふゝゝ乃ゝすれ共海松ゝ庵宗祇法師画像自歌ふ
ゝゝ云ゝハ彩ゝ世ゝ乃ゝ云ゝと云ゝぬ翁ゝ云ゝやまハゝ乃ゝと
海ゝ我彩の乃ゝ乃ゝぬゝと乃ゝ此詞を載入ゝ貞徳の讃ふ世ゝ
ゝ又云此句幼名や不知翁と云ふ續きハゝ乃ゝ乃ゝと
貞徳の幼名勝熊後ふ彷徨の名を以て逍遊軒と自称ゝ

もつて蕉翁も吾が祖先の幼名を不知ハ疎略也といへり○考るに
此論甚不審也。第一に次嶺経巻四山城国乃名所を集めるに
北村季吟の述作也。そもそも吟花廊逍遥軒貞徳也と妙法院
御門主より賜つて建立と云貞徳名のハ勝雄といひし剃髪
して勝雄彩と号す用ゐるに妙寿院逍遥軒と改めしを略して
延陀丸長頭丸ともいひき。然るに季吟ハ法さしく貞徳乃
弟子也。彷彿の事をかようて。逍遥軒といひしを入ふ記。後ハ逍遥
軒と改めしなり。こゝに荘子の逍遥遊といふも高れ色川
ちんかハ。季吟とのみ汎すべきなり。其一に芭蕉の祖先ハ伊賀
国ハ桃地黨なり。桃ハ桃井也。太平記の比舞乃家なりと貞徳

ハ松永弾正が末裔なりて。芭蕉の祖先なるべし。其説毫もなし。又俳
諧道系乃ごとくなるべし云々。然るに俳祖とも道祖とも記すべきなり。
祖先のごとハ氏族なりて。俳諧の血脈派流の事ハ用ゐ難き文なり
なり。島辨も亦亦惑説と出して云。もとより成ハ保平廣宗清の末
流也。伝て宗房と云ふ名乗しと。是ハ縁例なり。如此系圖とり
んかハ宗鑑の宗ハ宗近なり宗氏。公時の時ハ時政の時なり。小兒の帝を
止む。況乃如し。板本より出る世人迷ふの始。かしも信用すべうなし。
俳諧の先祖と系圖もなるべし。上古ハ思量次第なり。人々一派と建て
師の系図なりても。名人名哲名誉ハ今ハ伝て。何ぞ風雅平易
ようんや。翁ハ信道仁也。系図乃ごとしかるべ。打そるもとなる

ぶくさとやや。○深川の素隱士むし〳〵黒露よ語て曰。桃青の名ハ。その比京都の儒醫小桐山正哲と云博識あるしぶこと人（桃青名をつけてんべと。翁最初小杉市郎右衛門と名乗しが。詩經桃夭乃篇より桃青とハ名づけしとなり。是ハ桃井の音をとりて。姓をつけしなり。中。押もうるべき也。少〳〵氏族の松尾を名乗しとや。はじめ正哲そ俳名を智機と云て。長侍の大通辞。榮木仁左衛門が舎弟也と。先年猶中菴ニ子為作〳〵。実の化して。偽説を正すべし。支考十論小梅子未熟のつとめや。泥をしり事ハ。まことハ近て。淋よさも之ぶ化てのふこと思いれ侍るべ。○此句幼名やいこつふやハ歌貝のやうて切やや也。百菴ハ名出のや。に合ハやいふよの影へとこつるあやいぶ。

幼名ハ〳〵〳〵なるべ。かくみるべ。ふ歌貝をし也。貞徳如きし人の幼名幼〳〵幼〳〵め。芭蕉ともなし。句意ハ。幼名ハ勝延丸ともし人なき也。古き人ハ。まひえもせぶ。信て古き翁と。ふの翁と載入く。を像を動うさぶして。を幼名ハ〳〵しうう猛くをを伸ぶきぶ。傷よ是ハ丸と世よ稚をし陶。此ふの世活やきの。やさ翁とをハぶ。ちとハ〳〵〳〵〳〵

我くさの花ちるゆふ　乃ちひと　よ雨ふる　今
ぞ　ん　ち　り　ぬ　ハ　ぢ　い　う　記　如　る　て　と　あ　ち　く　日　分
ま　ち　ち　く　師　走　は　か　ま　ハ　日　ち　ぢ　あ　て　ち　ぬ　ち　く
ち　ぬ　ち　ぢ　。

ちる雪や幸庵ちまをうある
初ゆきや与仙乃葉はたらむまで

（説）此句諸書ニ　毎ちりはてしたらむやどと池と　ちりはて
出とする出さしぢ　人ち訪ち　句あやちそ　ちの人はちの　今十
移風ち家珍ち翁自筆の一軸ニはちるを見て池之　是ハ貞享　門師秋

乃ち墨跡也　初春ちち年尾までの句　ち十四章　方　可信也　此句此
詞也ありて　句意　ち　ぢ　ち　ち　ち　ち　ち　栄の　ち　ち　ち　ち　ち
ち　ち　ち　ち　ち　

ゆたかにして、句意八つのごとくなるかゞ、みな是らを俳とすべし。

やまうにうそをうゑうく

きぬむこぐきぐにもちかふうしのとし

(説)句選ニ、同じ初出を出して、句とゞ年の寄と記し、冬の部ニ出せし。尤ゝ、新ふて杉風家什の一抽ニ、此句ちぐはなるべし。浪よいくりふるうぐせ成の松ちぐとなる。多八ぐ浪ぐむこれ句も、歳旦と芭蕉、春八部ニ記すべき筈、率爾にして、りしはべ。今つゞおしくこゝ出せるものゝ、句意八正月ニ餅を、那らぬ義ゝ、餅屋ゝを、逆ゝ餅屋ゝを、逆ゝ餅屋ゝを、逆ゝ餅屋ゝ

ちぐの神也。なをちゝ、ちゝ初ていろゝ、ぐうゝずの句也。初出ニ、そゝをこゝて、と、ちぐ、ぐ、句選ニ、ちの蕉ゝ、ちの蕉ゝ、ちの蕉ゝ

行宣法印の物語なり 信實朝臣女三人ありし 少将内侍 弁内侍 藥壁門院少将 ことなりしかば おのゝ深くつきそうしのきこえん
藥壁門院の少将は ことに秀逸 らひもたしなみ ものやさしく ことに歌を感じて 系桂芳つ 光好 吉今
と云て 行人なる 美書 國母仙院 少將 為依 為此道之堪能 不顧老
眼之不堪 書寫之云云 少将内侍は 生ようせて 女人 弁内侍 藥 少将
壁門院 少将 先 出家して 法性寺の旧跡 住 平親清
の女 吾妻 のかりてさる 名 誉れ人 えん 法性寺乃
宿 所 まうり 持佛堂 入て 障子 の 書 深き 住
ふかくせまよ 清 さし 此 れ 法 すきも 源 面 て 老 の
尼 まいらせ

ぎさんはしまうめそといとれけるやさしく優かなる住れいおうはと
手とつゆおくりてみて中 おうめ云云 此次 又弁内侍 すも 泥を
見 女房 三人 ぐし れ 家 よ みて け 藥壁門院の 少将 こと に 家 よ
みし 住 出家せし 庭 よ 少将の尼と ふ 又 おのぶねの少将と いつる も 人
ぶる也 〇 白意 也 智 自 も 共 笑 常 尼 水 も あ ぐ ぶ り 手 名 為
愛 も 為 べ き す 少将の尼 ふ な ぐ ら へ て いつるや

いつ何ともあきのふかるてみぐと汁

説 句選 よ ハ さ ま ま も て と 絶 す 〇 白梅園路水の俳諧良材 よ
曰 翁 一 と せ き の ふ ハ る て て と 汁 云 句 を ま ま ま け み 家 を 歪 ら ん

て法の信徳う東武小第を訪ひくれ何とかの七宝に
られ侍る佶屈乃神をはらくあり能やらの海みはらと辛丑ひ
しあの日風をうつ〳〵信をうへてよりはのまこの星霜を布袋乃禅小
なるこ郡鄙の吟詠を宗祇の履すあしやとわして一度いすふ
一度八面すりの川の流を猶らして志うもりこの水みはらさるをしこ
むのつさしをはく日本乃杜子美句り今の世北西行ちり花晨
月夕ふも業為迅速の風はれてこ成かてて尋牛得牛の大路と
徒文せこ作〳〵句〳〵書〳〵やをすを八洞ふこち業耳すむ
の表あり見句しの〳〵の今ふ徴ふるこちあなるき此境成
りて此神をこう風ふこをこ侍八こ人ふはらこして八美こ西口

と夢ふ得こん事かくはるこも用ひむるをゆるさ仮こ思あって
共人と知る業八共乃志こ〳〵こ〳〵枕こ〳〵むす苞角小はこ
と心うけん人八はるこ〳〵ふ取捨を冥こふ得失ふこすこ〳〵
こ〳〵ふ殊小感驚〳〵佶を八爰小汎して四季は絶〳〵〳〵

右冬部終

十有八章

雜部

なのさ〻さ〻ぎ　まつ〻ほぞのつ

句選　ゐ行をとゐ文字をゐ一句也。秋季ゐ入る。又雜の部ゐわたるきとゐて一句を二句ゐして出るゝ事ゝ不堪也。此句の解せさゝ少ゝ分ぺし

句解　ゐ蓼ゐ此句ハ松島行脚れりし立後一名所ゐ新の格也新意句意ゐ袋ゐ麻ゐ棹ゐ

此句ハ名所ゐ新の格也新意句意ゐ袋ゐ麻ゐ棹ゐ

ゐ出て句の意ハ麻の棹ゐかゝるを見ハ絹と紵布と松島ゐうけてすゝとゐ意乃ゐとゐしてかゝるハ作者の意を考ゐてむさと重なり此句ゐ片ゐ事ハ事ゝ卒忽ゐ

ゐすやにしも下ゐ家ゐ匠も成ゐきと二つゐ人の故なくて季ゐ

ゐ一ゐ此発句ハ事ゝ次ゐ

説　三書ゐ小此句解ゐ此ゐ

ゐる。ゐ絹笑ゐ麻ゐ棹ゐ盲者ゐ疾毒ゐ

後世ゐ流ゐ事也。ゐ事ゐ卒忽ゐ不解

忽卒ゐ云ハ事ゐ卒爾ゐ誤

ゐ不審也。此句ゐ解ゐ人ゐ歌

ゐ。鼻ゐ先眼ゐ前ゐ。ゐ遠ゐ仕迫ゐ

ゐ。○古今抄ゐ三ゐ一ゐ和ゐ撰集ゐ

雜ゐ題ゐ新ゐ拾ゐ連俳ゐ名ゐ

しの今の俳諧ゐを深さハ雑の発句ハ名ゐ〳〵の見ゆ〳〵て
四季乃新立ゆ曲節〳〵ゑ（〳〵今掲るに名所ゆ新（発句
ゑ）一句ゑ異所名を出し〳〵風景の情をうつ〳〵志の中ゑ當
季ゆ活話ゑんと雲ん為情ハうゑ〳〵すゆ〳〵やゑなる所〳〵せ
雲泊の吟行ゆあさよきゑ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ハ中指〳〵れとゑの浦山乃為情
を〳〵ゑ活泥ゆ〳〵ゑ〳〵ゆ〳〵〳〵ゑ〳〵〳〵袋ゆ新の句と〳〵
るハゆ〳〵と泥ゑも亦偏僻也。和歌連歌ゆもゆハゆ俳諧ゆ
も何ぞなくてあ〳〵ゑんやゆ〳〵又なき事ゆもせよ。翁〳〵悉
皆ゆて発し給ゑんハ却てゆの変ゑて。抜群の業〳〵也。是凡
才ゆ行〳〵ざる少〳〵也。解ゆ松浦ゑん立給（ゑ此乃吟ゑ〳〵ゑ亦

不吟味也。依て古今抄を引て。澄ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑの也。○馬光日記乃
内素堂夜話聞書ゆ曰。あさよさとゆ朔。諸人名所と思ゆ
ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵。奥羽乃方言ゆ。彩とゆのさ〳〵。夜るをよさ。夕を
ゆ〳〵さ〳〵ゑん。彩ゆよさハ。爰ゆめし日数彩。旦暮ゆ〳〵ゑ。彩数さ
なゑ〳〵さをつけゑハ。鄙の詞ゆて。今清國ゑても。夕さこがれ。数さ
ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵

人のもてなしと、月のやどりを乞るが、今松島に来て見れば、さして給し人をなつかしきよ。さてはいつの風雅みうるまで念想みやと、親書しかくのごとくあるべし。自然さる風ぶり、雖ども、しかと、北流よりひうけてもらぬをとる所也。同て云、田舎は詩もて泊、発句小入つゝひてをよれば、答此さりぬ。詩も極免ぶし、又一向に詩もて泊加もも所ところは方言なれば、記行乃句あるべきをすべきもの。既に清風ぶりに寄るべしの。はつの寄りして病するなると句ぶり、是を而く濃泊を載入く、他所へも動せまべき一助なるべなし。松島乃吟行よ。奥の泊を入れよ。詩るもいやしむべうぶ。新よ

さわてこそ所たしふ居、句意も一二は切よ書えしを

在の年八月に家紙乃やどりに

笈日記云三月四日元禄武江を動て十二日八阿叟の忌日つとめて桃隣いさなひて深川の長渓寺に参て待る（史邦が小文庫よも長渓寺とかく）

（今長慶寺）と書しハ共後に改め給ふ）是八阿叟の生前に杖を曳寺し

ゝ有又此塚を発句塚といへ（ゆるハ世の中ハさるに宗紙の）此短冊とけ

源ふ埋めるる也。此雲白雲を庵一生に雲為ゝ人ゝ

移風の句ゝ

（説）芭蕉寺の翁乃塚と、時雨塚と呼ぶ人ゝ有り是も

まゝ誤也。史邦が小文庫ゆゑ。發句塚をけう。時雨ふるゝ
たびごとに。本説とゝ〻ゆ人乃。ほ〻しなるべし。此外ふ書
し給事。句作ゝあるべし。老衰氣憶面うべ。并ゆゝ拾忘
なき世人なりて。ゆゝうゝ正しゝ給ふ事なく歎のゝ

蕉翁發句説叢大全第五大尾

跋

ゆゝゆゝ句作ゝ爲のにやるゝ慣めど反哺の乃ハ知ゝ
其道ゝゝゆゝうゝ乃ゝゝぶゝゝるゝゝとゝしゝうゝ
家此道業ゆゝあゝ祈て四十年来此乃りて難し
つゝ多さ拙さもゝ〻ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

凡経史子集の類皆注解あるとなれども其注者の見識の精粗氣質の偏駁あるを免れず乃ち料理の塩の幸きがごとく臭味あるを中道持鹽梅の調和するが如く多し嚮小蕉翁の白解濃淡抄世に流布せる彩もの少うして夫れ俳道に多論なるや上八王子公孫の威儀なる

下野馬士船頭乃抓と合巷居乃方振を專街
の獻酒はても擬ひ事こ神を賤比興乃こ淡
糸配一倍談乎話ゑ事を風雅頌の二韻を扱
烟後の人是を釋せむ糸五所乃方言五音の
清濁の遠も有て何ゑ一朝一夕ゑ解一変
さむや其解ゑる人を要氣質の稟乃事
詩一ゑ事てとゆくいゑ所面直の人を不知を不知

あ〻一て後學乃讓乃心乃按排を加え次邪
慢の人い不知を已ゑ管見茂附會一誤乃
知ても是こ乃辭つく〻宜非糸非を鑿ぬ世乃學
女子乃仙学風壯士も竹乃醫者に化乃出家を竹
乃様数を放さぬ神乃主もあ乃天狗乃如ゑ風
ゑ伏を有て其柔弱も於虜を暗昧も高慢も感
自己乃得乃帆を上て大洋ゑも走んとゑ是

而對して論ぜんと欲ス漢樵乃云ハく

神を周人乃死鼠鄭人のあるを以て純風俗

を改めん是を智ひ愚うして童蒙の謎〳〵

行樵と解んも側らを問んと云ふを

理乃以ておもうこと〳〵茲を絢堂の老人性俳を

嗜み行立坐外に是を廢ちて舊翁の心孫を

量り白意乃齟齬するもの後學の迷ん事

を深く歎て新に注解ん事を欲ス内典

外典ともに風流の今物語すて理を覺るを

不淺十餘年の功累て更書を說叢大全を

て說とは諸說也叢とは集略也諸抄を集めて

全く正當の解を為すは誠に純くて「ちかとて」

「ちかとて」莫邪を鈍とし鉛刀を利とする人

と多事なれ此元乃解ちも難ちる人有んこう

組令注釋乃粗密をあらそふ其志乃眞を爭こ
ゝ乃夫暴八佐保毘き子を此人と倶ゟ夕可菴下
ゝ遊如事乃多幸此老の主一無適乃志一家一流
儒績見数ゝ隨ゝ聞み鴻く感賞す後學の士
此書を閲して謹ゝ其志乃深厚を仰慕
衆盲の象を摸さるゝ如く一所止屠ゝ必
誤ゝ事ゝ抄子乃圏兩を見を入道と尺て他

ゝ笑ゝ毘ゝゝを能精神を定めゝ其蘊奥を
探を絢翁の志を繼ひて怠ゝ毘ゝ乃ゝ
蕉翁乃骨髓を至らん事又難ゝと雖
ゝ辭を不顧其輙を述ゝ其大尾み題すと
云ゝ

癸巳のとし　　うぢしこう　鄉魯誌

鄉魯

說叢大全跋

蓋蕉翁之於德音也其盛矣乎片言朝咏嘆則洋溢乎天下之耳焉一章夕吟呻則鱠炙乎天下之口焉然而風調出神髓清味潛

淡薄濫乎其不可究也非善逢其原者未矣越項年三部注解競起而兄弟鬩于牆其說嚚然載鬼一車復妄鑿空導人於迷塗豈不痛乎牽絢堂主人素丸君崛起江左有閲之于夙夜憂之耿耿焉遂爲後昆忘辰寒秋風之箴以成此稿也褒之貶之臨文不諱廢之舉之當論不讓徵之取之左右歷涉諸家苟

無沿襲之私可謂不朽之
明辯也是篇始出蕉門之
蓑塞闢之廓如鳴呼時機
之否泰既別而一洗蕉君
一字一涙之心骨矣孰不
雀躍哉又内則慰乞翁之

幽憾而致孝於君蒿外則
警醒衆人之惑而傳鑒於
後來兵可感斯卷亦丸君
一言一涙也僕之小黠雖
匝及茲而忝奉筆授之命
敢猥以餘墨汚殘紙辭罪

○巻第五大尾

無地爾于時

安永二癸巳春三月

北武州奥驛備後郷

門人敬林謹跋并書

書林　京麩屋町三条上ル　勝田吉兵衛